

## 序

高崎市は、古来より関東と信越をつなぐ交通の要衝に位置する人口約37万2千人の中核市です。

令和2年3月には、高崎市吉井町の多胡郡正倉跡が新たに国指定史跡に指定されました。法倉と推定される総瓦葺の莊厳な礎石建物は、全国の官衙遺跡でも有数の規模を誇ります。多胡郡正倉跡は、平成29年10月にユネスコ「世界の記憶」に登録された上野三碑のひとつ、多胡碑に記された碑文の内容と関連した遺構として広く注目されています。この登録を契機に、本市の持つ文化財の価値が日本国内はもとより世界に広く知られることを期待しています。

本書は、高崎市三ツ寺町における高崎市立群馬南中学校仮設校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。中林遺跡周辺では、古墳時代居館跡として著名な三ツ寺I遺跡をはじめ、弥生時代後期から平安時代にかけての集落跡や水田跡が濃密に分布しており、このたびの調査では、平安時代の溝跡などを確認し、この地において古来より連綿と紡がれる人々の生活を垣間見ることができます。本書を通じて高崎市の多様な歴史を知る一助となれば幸いと存じます。

結びに、本遺跡の発掘調査および報告書刊行にあたりご協力をいただきました関係機関ならびに関係者の皆様に心から感謝申し上げ、序といたします。

令和3年3月

高崎市教育委員会  
教育長 飯野眞幸



## 例 言

1. 本書は高崎市立群馬南中学校仮設校舎建設に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡名、遺跡番号、所在地ならびに事業内容、事業主体は以下の通りである。

遺跡番号・遺跡名	787 中林遺跡2
所在地	高崎市三ツ寺町712
事業内容	高崎市立群馬南中学校仮設校舎建設
事業主体	高崎市

3. 発掘調査および整理作業は高崎市教育委員会事務局教育部文化財保護課埋蔵文化財担当が行った。発掘調査体制は次の通りである。

教育長 飯野 真幸

教育部長 小見 幸雄

文化財保護課長 角田 真也

課長補佐 令和元年度 神澤久幸・矢島 浩 令和2年度 神澤久幸・清水 豊

庶務担当 岡田清香・小暮里恵・閔口芳治・滝沢 匡

調査担当 田辺芳昭

4. 発掘調査および整理期間は以下の通りである。

発掘調査期間 令和元年12月13日～令和2年1月31日

整理期間 令和2年 5月11日～令和3年3月31日

5. 本書の執筆は田辺が行った。

6. 遺構・遺物の写真撮影は田辺がを行い、図版等の作成は田辺の指示のもと補助員が実施した。

7. 発掘調査における表土掘削及び埋め戻し作業は(株)井ノ上が実施した。

8. 遺構平面測量図の作成は(株)測研に委託した。

9. 発掘調査により出土した遺物や記録図面、写真類は高崎市教育委員会文化財保護課で保管している。

10. 発掘調査にあたり、関係者および関係機関、所管部署にご協力をいただいた。

11. 発掘調査および整理作業には多くの補助員にご尽力をいただいた。記して感謝する。

## 凡 例

1. 本書に使用した地図は、1/2500 高崎市都市計画図をもとに作成した。
2. 本書中の座標値は平面直角座標第IX系国家座標（世界測地系）をもち、方位は同座標北(G. N.)である。断面図に付した標高はT. P.を基準とした。
3. 本書中の図版縮尺は各図に表示している。
4. 土層の色調および土壤の注記は、農林水産省農林水産技術会事務局および(財)日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』を使用した。
5. 遺構名称および遺構番号は、調査時に付したものを使用し、遺構の略号は次のものを使用した。  
S D =溝跡 SK =土坑
6. 火山噴出物には次の略号を使用した。  
浅間A軽石 : As-A 1783(天明3)年 浅間B軽石 : As-B 1108(嘉祥3・天仁元)年  
浅間C軽石 : As-C 3世紀末~4世紀初頭 榛名二ツ岳洪川テフラ : Hr-FA 6世紀初頭  
浅間板鼻黄色軽石 : As-YP 15000年前 - 16500年前

## 目 次

---

序文・例言・凡例

第1章 調査に至る経緯・経過	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 標準層序	1
第3節 歴史的環境	1
第3章 調査の概要	4
第1節 中林遺跡との関連	4
第2節 確認構について	4
第3節 まとめ	4
第4章 調査された遺構	7

写真図版

抄録・奥付

## 挿図目次

---

第1図 周辺の遺跡図	3
第2図 中林遺跡2 調査区配置図	5
第3図 中林遺跡2 調査区全体図及び基本土層柱状図	6
第4図 SD1 平面図・断面図	7
第5図 SD2 平面図・断面図・出土遺物	8
第6図 SK1~3 平面図・断面図・出土遺物	9
第7図 遺構外出土遺物分布図	10
第8図 調査区南壁断面図	10
第9図 遺構外出土遺物	11

## 第1章 調査に至る経緯・経過

令和元年8月、高崎市教育部教育総務課（以下教育総務課）より、周知の埋蔵文化財包蔵地内での仮設校舎建設について通知があった。令和元年8月21日、確認調査を実施したところ、現地表下30cmで平安時代の溝跡を確認した。確認調査結果をふまえ教育総務課と協議を行った結果、工事により影響をうける部分について発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなった。

調査の方法は、仮設校舎建設範囲（130m<sup>2</sup>）を対象とし、表土（造成土）を重機により除去後、人力により遺構の確認および埋没土除去作業を行った。なお、対象地南西隅付近ではAs-B層が良好に残存していたことから、平安時代水田跡の存在を想定し、As-B層直下の精査を実施した。そして、遺構・遺物の確認状況を測量および写真により記録し調査を完了した。

## 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

中林遺跡2（以下本遺跡）は、榛名山南東麓の相馬ヶ原扇状地裾部標高122m付近にあり、南南東へと流れる唐沢川および西方に並行する猿府川に画された微高地上に位置する。同微高地の東西幅は本遺跡周辺で250mほど、総じて南方向への緩斜面地で、さらに本遺跡西側は、猿府川縁辺に形成された低湿地に向かい、南西方向へと傾斜している。なお、唐沢川と猿府川は本遺跡南1.3km付近で合わさり、やがて、相馬ヶ原扇状地南西縁辺を流れる井野川へと合流している。

### 第2節 標準層序（第3図）

- I 造成土層：校舎建設にともなう造成土。上面に碎石が敷かれる。
- II 黒褐色土層：造成以前の耕作土。粘性に乏しくAs-Bが混入する。As-Aの混入も想定されるが、土層断面の観察では識別できなかった。
- III 黒褐色土層：IIと比べ色調はやや暗く、土質は同様である。As-Bが密に混入する。
- IV As-B層：一次堆積。調査区南西隅付近およびSD2埋没土内で確認された。
- V 暗褐色土層：やや粘性あり。As-Cを含む。古墳時代（5世紀後半）～平安時代の遺物を包含する。
- VI 黄褐色・灰黄褐色・黄橙色土層：榛名山起源の泥流堆積土。総じて砂性で硬い。一部でAs-YPの混入がみられる。

### 第3節 歴史的環境（第1図）

**縄文時代** 前期中葉（4）、前期後半（8）、中期中葉（12）、中期後半（9）、後期前半（12）の竪穴建物確認例があり、断続的にごく小規模な居住域が点在していたようである。なお、出土遺物は早期後半から後期中葉のものがみられる。

**弥生時代** 井野川左岸の唐沢・猿府両河川合流地点付近で中期後半の竪穴建物跡が散見される（8・12）。後期になると、居住域は規模を増し、より上流域へと拡大する（6・8・9～12）。一方、井野川流域に形成された低湿地では、少なくとも中期後半には水田耕作が行われていた可能性がある（14）。

**古墳時代** 熊野堂遺跡（8）で確認された前方後方形の「1号周溝墓」は、堀の埋没土中にAs-C層があり、3世紀後半の構築とされ、被葬者は東海西部地方の人々と関連した集団の長と考えられている。一方As-Cに埋没した水田跡（13・14・15）は井野川流域の低湿地で広範囲に認められ、微高地上に畠跡（8）がみられる。このことは、前記集団による組織的な開拓により、耕作地の面積が飛躍的に拡大したことを示す。

5世紀後半頃、当地域には有力首長の拠点が営まれ、墳丘長100m前後の前方後円墳3基からなる保渡田古墳群(16~18)や居館が築かれる。居館跡(3)は本遺跡北西に隣接し、館本体は平面1辺86mの方形、柵で囲まれた内部には大型掘立柱建物や祭祀施設などが存在し、館周囲は幅30m~40m、深さ約3m~4mの濠が囲む。同濠は、猿府川流路を改変し、堰を設けて貯水機能をもたせており、高度な測量や土木の技術が存在したことを示す。一方居住域(2・4~6・8)や畠作地(14・4・6)は、さらに上流域へと拡大する。水田耕作地の立地は前時期をほぼ踏襲するが、同道遺跡(15)では湧水灌漑から河川灌漑への変化があり、給水量の増加がはかられる。また芦田貝戸遺跡(14)では、河川から取水していた基幹水路とされる大溝(上幅8.6m・深さ3.6m)が確認されている。6世紀初頭及び中葉の2度の榛名山噴火で当地域は被災し、井野川右岸一帯などでは厚い泥流に覆われて地形が一変した。そして被災と連動するように、周辺で大型前方後円墳はみられなくなる。なお、井出二子山古墳(16)の西に営まれた群集墳(井出北畠遺跡・21)では、6世紀後葉まで造墓が継続されている。6世紀中葉の被災以降、畠や水田に明確な復旧痕跡がみられない一方で、居住域はさらに上流域への広がりをみせ(5)、平安時代までほぼ連綿と継続していく。

#### 奈良・平安時代

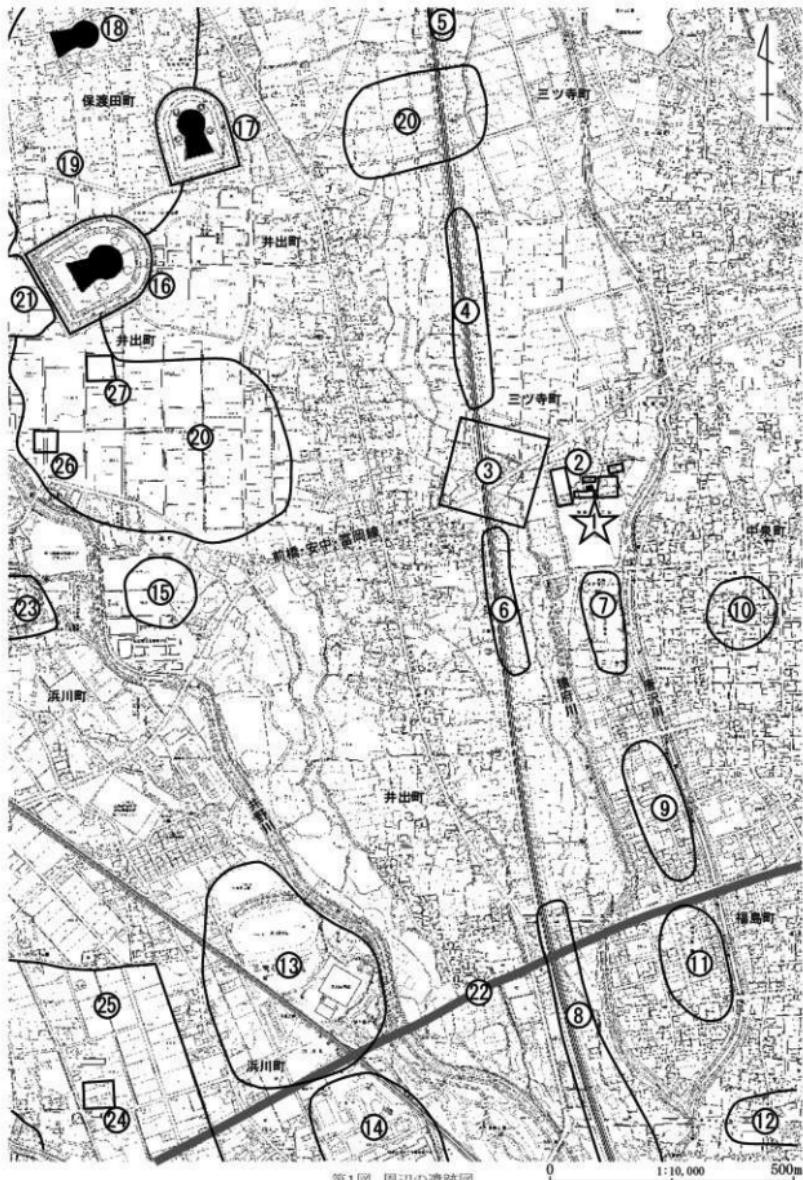
本遺跡の南約1.7km、井野川右岸に所在する大八木屋敷遺跡は、奈良時代以降に新規開発された居住域で、平安時代にかけて掘立柱建物が多数構築され、官衙など公的施設の可能性が考えられている。また、本遺跡南約900mを推定東山道駅跡(国府ルート・22)が通過し、推定線上の複数箇所で道路構造が確認されている(8・13・11)。また、平安時代とされるAs-Bに埋没した水田跡は、古墳時代水田跡と重なる(14・20・24)ものや、猿府川流域の低湿地では、新規の開発が想定されるものの(2~4・6)がみられる。

#### 中世

井野川右岸一帯を中心とする地域は、14世紀頃までは長野氏の開発拠点になったとされ、関連する城館址が点在し(23・24)、一部で発掘調査が実施されている(8・14・20・25)。長野氏は、上野国の国人一揆(上州白旗一揆)の旗頭として勢力を拡大し、15世紀末から16世紀前半頃に箕輪城を築き、上野国西部で最大の武士団に成長した。

- 参考文献 『新編高崎市史 資料編1 原始古代I』高崎市 2000  
『新編高崎市史 資料編2 原始古代II』高崎市 1999  
『新編高崎市史 資料編3 中世I』高崎市 1996  
『新編高崎市史 通史編1 原始古代』高崎市 2003  
『群馬町誌 資料編1 原始古代中世』群馬町誌刊行委員会 1998  
『群馬町誌 通史編上 原始古代中世近世』群馬町誌刊行委員会 2001

- |             |              |                  |              |             |
|-------------|--------------|------------------|--------------|-------------|
| 1. 中林遺跡     | 2. 中林遺跡      | 3. 三ツ寺I遺跡        | 4. 三ツ寺II遺跡   | 5. 三ツ寺III遺跡 |
| 6. 井出村東遺跡   | 7. 三ツ寺大下遺跡群  | 8. 熊野堂遺跡         | 9. 西浦北遺跡     | 10. 権現原遺跡   |
| 11. 西浦南遺跡   | 12. 雨壺遺跡     | 13. 御布呂遺跡        | 14. 芦田貝戸遺跡   | 15. 脊道遺跡    |
| 16. 井出二子山古墳 | 17. 保渡田八幡塚古墳 | 18. 保渡田薬師塚古墳     | 19. 保渡田VII遺跡 |             |
| 20. 井出地区遺跡群 | 21. 井出北畠遺跡   | 22. 推定東山道(国府ルート) | 23. 浜川館      |             |
| 24. 寺ノ内館    | 25. 寺ノ内遺跡    | 26. 元井出館         | 27. 花城寺館     |             |



第1図 周辺の遺跡図

0 1:10,000 500m

## 第3章 調査の概要

### 第1節 中林遺跡との関連（第2図）

中林遺跡は、昭和56年12月10日～昭和57年5月10日にかけて、群馬町立南中学校（現高崎市立群馬南中学校）建設に伴い調査が実施された。古墳時代（5世紀後半～7世紀後半）から平安時代（9世紀後半）の堅穴建物53棟を確認した。なお、堅穴建物は調査対象箇所の東側、唐沢川右岸寄りに集中し、出土遺物から構築時期が想定可能な39棟のうち30棟が5世紀後半（16棟）～6世紀前半（14棟）である。一方、猿府川縁辺の低湿地ではAs-B層下で水田跡が確認され、居住域と水田跡の間は、構築時期不明の溝跡複数が原則南方向へ走行している。注意されるのは、5世紀後半の堅穴建物跡（1区10号住居址）の南西隅のピットから子持勾玉が出土しており、首長居館に隣接する本居住域の性格を想定するうえで、重要な成果が得られている。

今回実施した中林遺跡2次調査の調査箇所は、上記調査の空白部分となる現校舎中庭部分で、居住域と水田域の間に該当する。

### 第2節 確認遺構について（第3図）

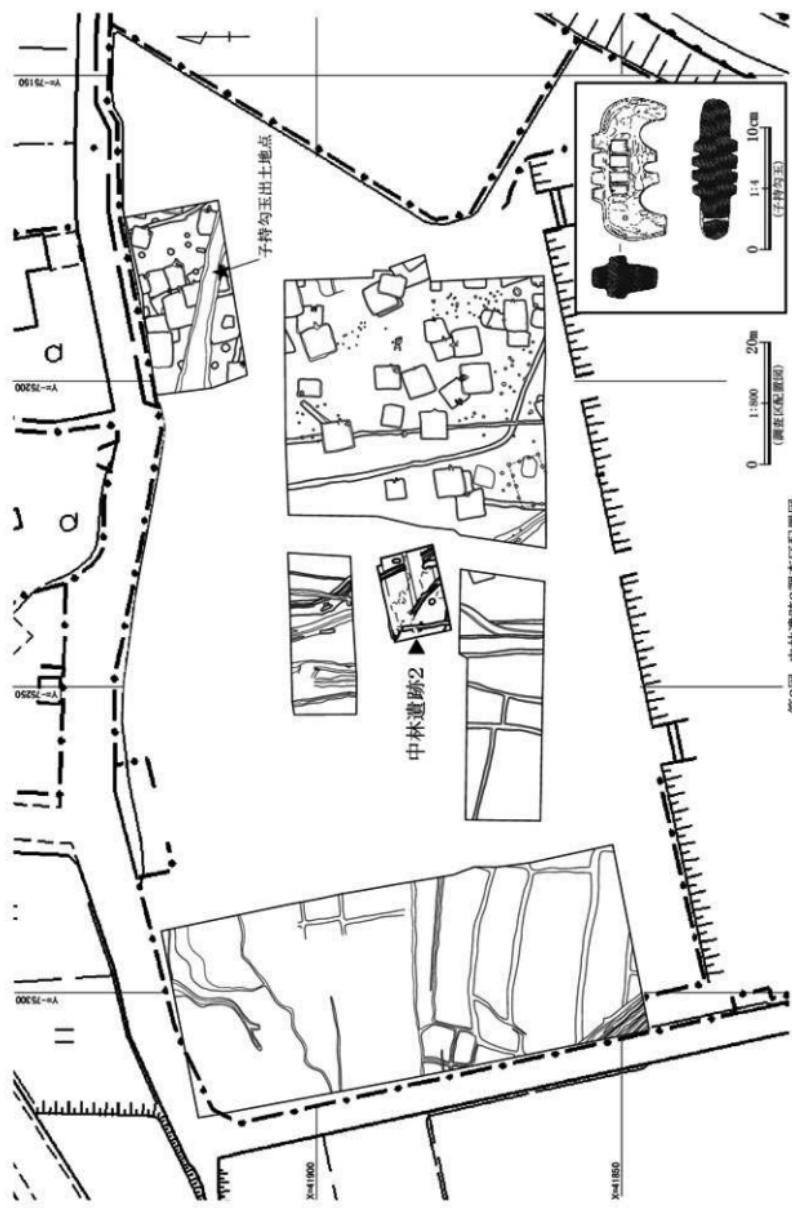
造成土（I層）および造成前の耕作土（II層）を除去した結果、調査区南東隅一帯の低湿地へと緩やかに落ち込む部分にAs-B層（IV層）の広がりを認めた。この他では、I・II層直下は基盤層（VI）であった。確認遺構は溝跡2条（SD1・2）、土坑3基（SK1～3）で、溝跡の南北延長部分は中林遺跡で調査されている。SD1は調査区西端にあり、構築時期は、埋没土がAs-B混入土であること、As-Bが降下ユニットを保ったままブロック状に存在することなどからAs-B降下後比較的間もない頃ではないだろうか。SD2は調査区東端にあり、構築時期は埋没土内下位にAs-B層がみられることから、水田跡と同じかやや先行すると思われる。SK1はSD1と埋没土の状況が類似することから、構築時期がSD1に比較的近い可能性がある。SK2は人為的に埋め戻されており、構築時期はAs-B降下後である。SK3は埋没土内で出土した土器片から、縄文時代中期後半のものと思われる。

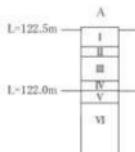
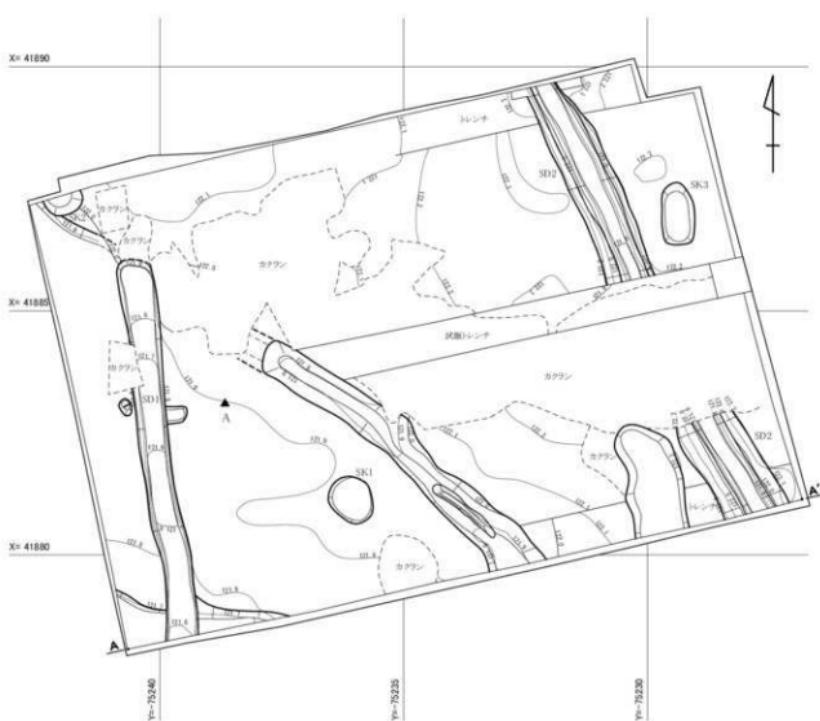
As-B層が残存する部分では、水田跡の存在を想定し同層直下の精査を行ったところ、調査区西境付近で農具痕とおもわれる凹凸が顕著にみられたほか、畦の確認はなかった。次に、As-B層下に堆積した黒褐色土（V層）を掘り下げたところ、直下の基盤層（VI層）上面は、顕著な凹凸もなく、緩やかに東西に傾き、以東との傾斜変換となる縁辺部は浅い溝状に落ち込んでいた。同箇所は以西に存在する平安時代水田跡の縁辺部にあたるため、何らかの整地行為が想定される。なおV層内では古墳時代（5世紀後半頃）および平安時代（9・10世紀頃）の土器小破片が混在しており、整地行為の時期が平安時代である可能性を示している。

### 第3節 まとめ

三ツ寺I遺跡で調査された首長居館跡の隣接地であるが、関連する遺構は認められなかった。一方で、平安時代新たに開発された水田耕作地について縁辺部の土地利用の状況をうかがい知る資料が得られた。

第2图 中林遗址2调查区剖面图





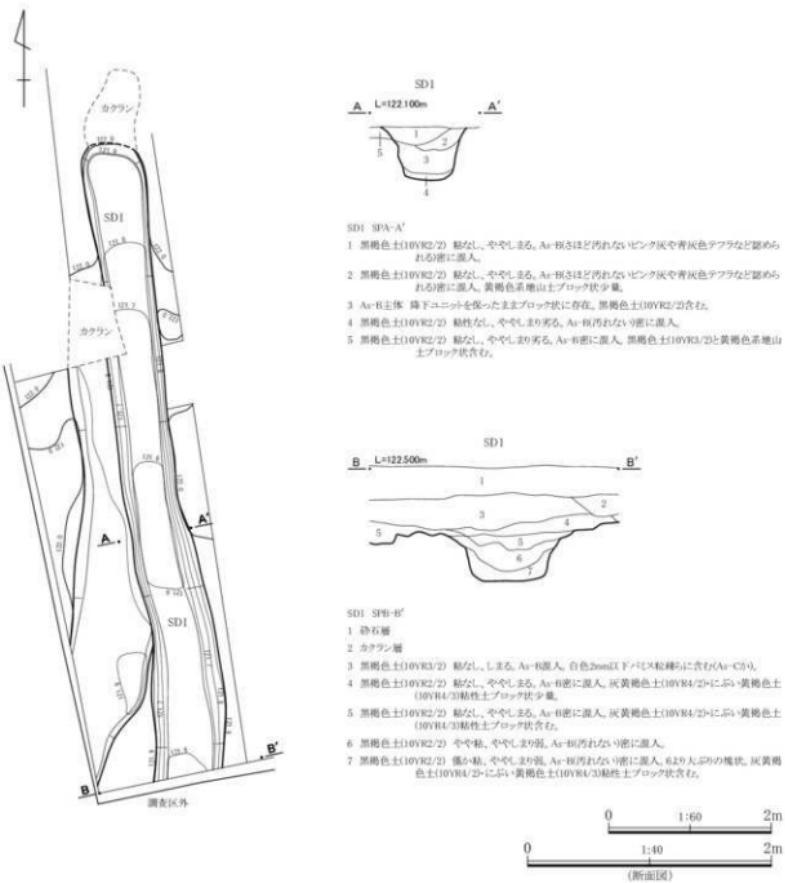
令和元年度試験調査(H1-50)  
 I インターコーニング・砂石を含む。  
 II 黒褐色土(OYH3/2) 硬質で粘性は強い。  
 III 黒褐色土(OYH3/2) 硬質で粘性は弱い。Ar-Bcを多量に含む。  
 IV Ar-Bcを含む。  
 V 球粒色土(OYH3/3) 硬質で粘性は強い。  
 VI 褐色土(OYH4/6) 硬質で粘性は強い。

令和元年度試験調査  
基本土層柱状図



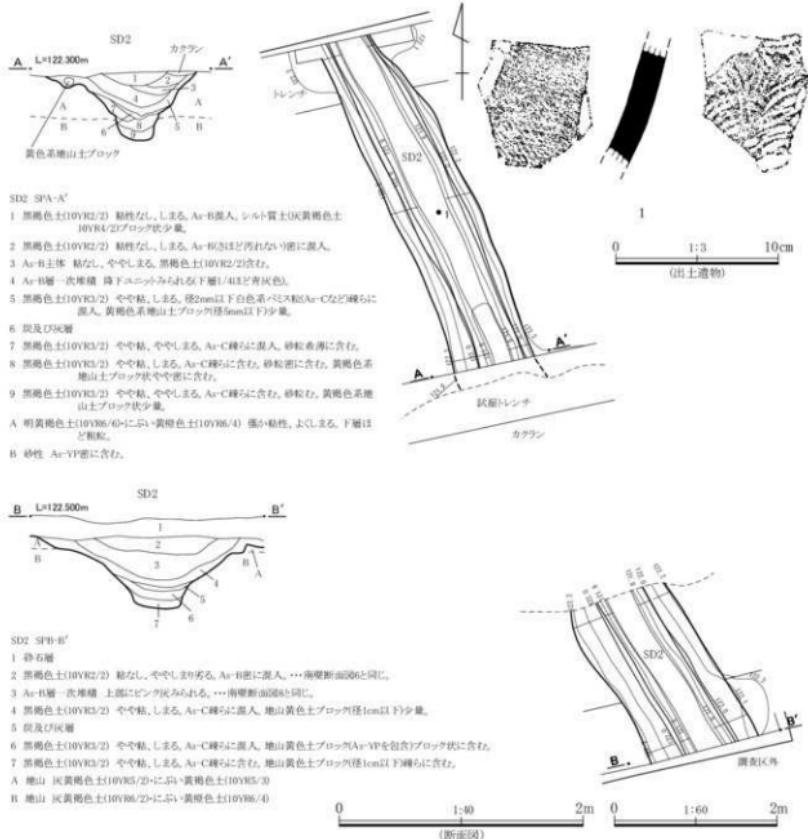
第3図 中林遺跡2 調査区全体図及び基本土層柱状図

## 第4章 調査された遺構



第4図 SD1 平面図・断面図

SD1	第4回 / PL1	位置	調査区西	重複関係	—
走向軸	概ね N - 173° - E			幅	概ね 0.62 ~ 0.91
確認部	7.80~			基底面	比較的平坦。南へ傾く。
断面形態	基底ほぼ平坦、外傾ぎみに立ち上がり、上端開く。			遺物	なし。
所見	調査区内で北端を確認。構築時期は埋没土の状況から、As-B降下後比較的間もない頃と思われる。				



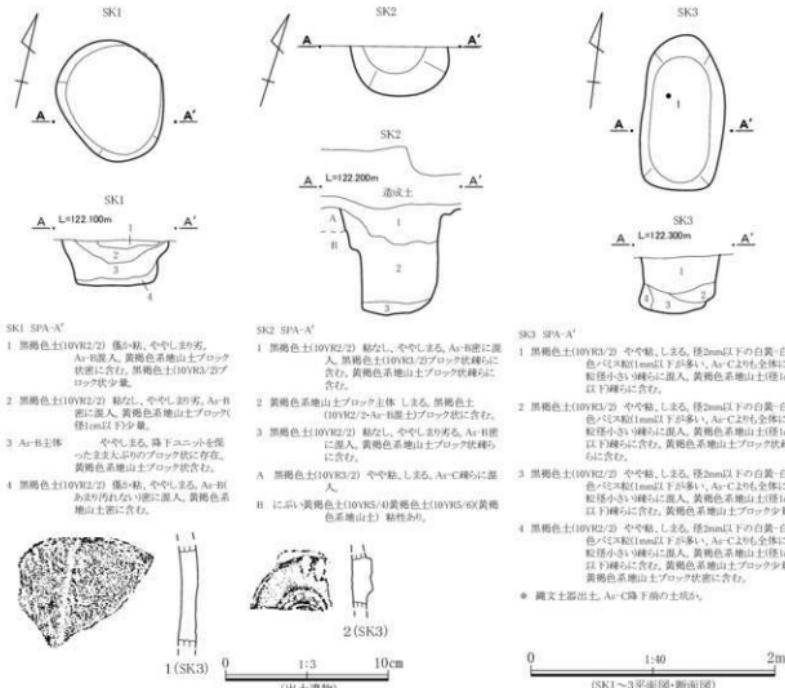
第5図 SD2平面図・断面図・出土遺物

中林道路2 溝造構觀察表

SD2	第5図 / PL1.2	位 置	調査区東	重複関係	-
走向軸	概ね N - 153° - E			幅	概ね 0.67 ~ 1.32
確認部	9.78~			基底面	ほぼ平坦。南側が僅かに低い。
断面形態	基底上20cmほど外傾ぎみに立ち上がり以上は大きく開く。			遺 物	須恵器・甕(1)の破片出土。
所 見	構築時期は出土遺物や埋没土の観察から9・10世紀頃と思われる。				

中林道路2 溝造物観察表

番号	器種	法量(cm)	①残存 ②色調 ③胎土。焼成の特徴	器形、成・整形技法の特徴	出土レベル
1	須恵器 大甕	口径 - 底径 - 器高 [7.8]	①腹部破片②灰白色	外面 織目。 内面 同心円状あて目。	1cm



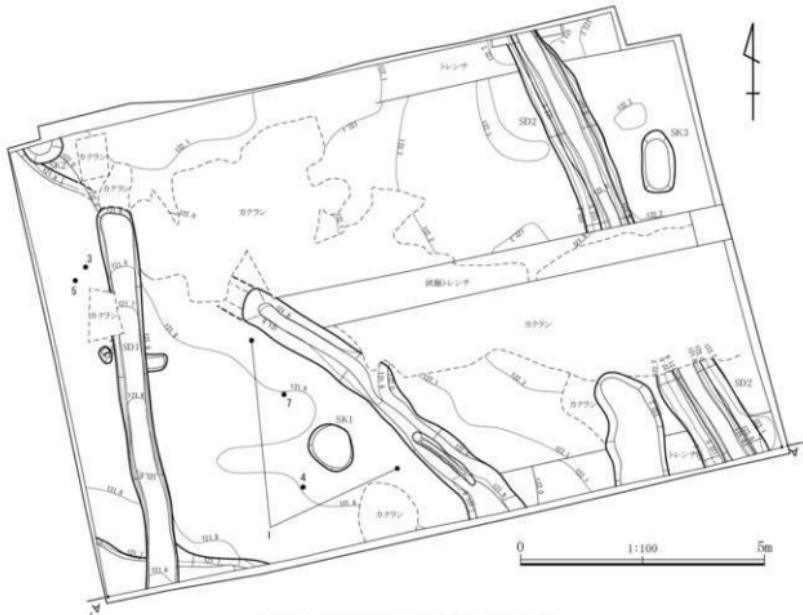
第6図 SK1~3平面図・断面図・出土遺物

中林道路2 土坑遺構観察表

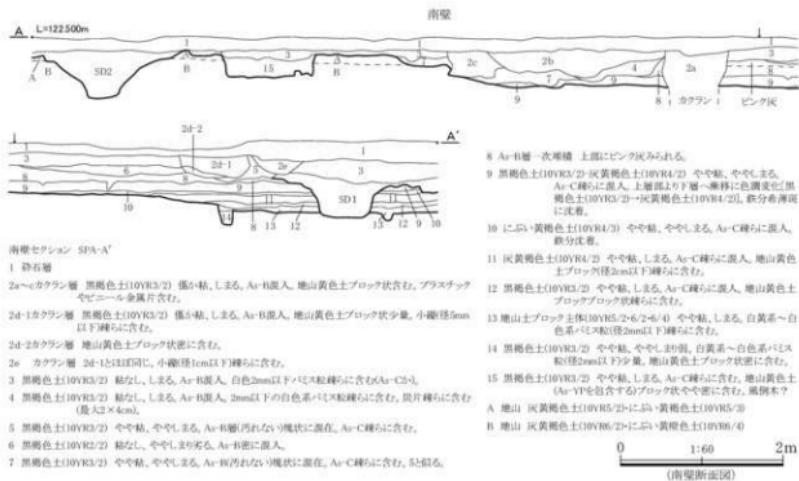
SK1	第6図 / PL2	位 置	調査区中央南	重複関係	—	時期	As-B降下後	主軸	N - 134° - E
平面形態	不整円形状	断面形態	基底面は平坦・立上りは外傾する。				長軸・短軸	1.00・0.85	深さ 0.38
SK2	第6図 / PL2	位 置	調査区北西	重複関係	—	時期	As-B降下後	主軸	N - 73° - E
平面形態	不整円形状	断面形態	基底面は緩やかな凹凸有・立上りは垂直。				長軸・短軸	0.80・0.40~	深さ 0.90
SK3	第6図 / PL2	位 置	調査区北東	重複関係	—	時期	縄文時代中期か	主軸	N - 177° - E
平面形態	橢円形状	断面形態	基底面は緩やかな凹凸有・立上りほぼ垂直。				長軸・短軸	1.28・0.67	深さ 0.48

中林道路2 遺物観察表

SK3 (○:復元値, [ ]:残存値)									
番号	器種	法量(cm)	①残存 ②色調 ③軸土, 烧成の特徴	器形, 成・整形技法の特徴			出土レベル		
1	繩文土器	口径 - 底径 - 脚高 -	①腹部破片②灰白色	外面 繩目。 内面 漆撲。				13cm	
2	繩文土器	口径 - 底径 - 脚高 -	①腹部破片②にい黄褐色	外面 内面				覆土	

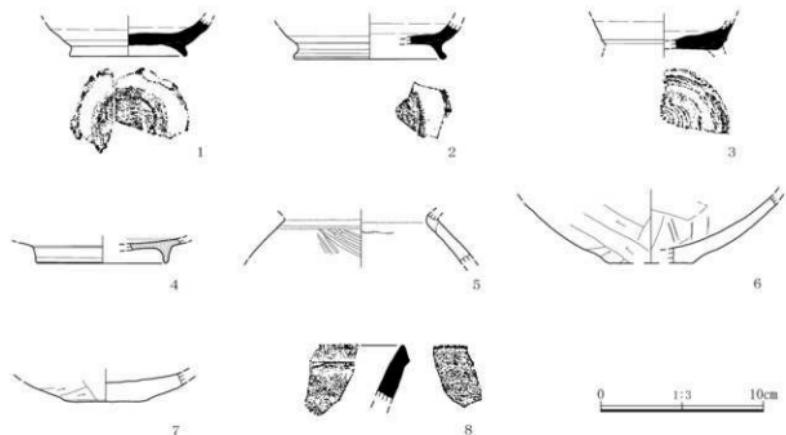


第7図 中林遺跡2 遺構外出土遺物分布図



第8図 調査区南壁断面図

遺構外出土遺物



第9図 中林遺跡2 遺構外出土遺物

中林遺跡2 遺物観察表

遺構外出土遺物			
	( ):復元値、[ ]:残存値		
1 須恵器 壇	口径 - 底径 (7.2) 器高 [2.2]	①底部～体部破片灰白色	外面 体部輪縫整形。底部回転系切刃。 内面 底部～体部輪縫整形。
2 須恵器 壇	口径 - 底径 (9.0) 器高 [2.3]	①底部～体部破片灰白色	外面 体部輪縫整形。底部回転系切刃。 内面 底部～体部輪縫整形。 体部丸みを持ち幅長い高台を付す。
3 須恵器 壇	口径 - 底径 (7.3) 器高 [1.8]	①底部～体部破片、高台部欠損 ②灰白色	外面 体部輪縫整形。底部回転系切刃。 内面 底部～体部輪縫整形。
4 灰釉陶器	口径 - 底径 (8.0) 器高 [1.6]	①底部～体部破片灰白色	高台内傾。体部内面に施塗。
5 土師器 壇	口径 - 底径 - 器高 [3.2]	①口縁一部～胴部破片②橙色	外面 脇部鋸磨き。 内面 脇部鋸磨。
6 土師器 壇	口径 - 底径 (5.2) 器高 [4.2]	①底部～胴部破片②赤褐色	外面 底部～胴部鋸削り。 内面 底部～胴部鋸磨。 平底。胴部大きめ。
7 土師器 壇	口径 - 底径 - 器高 [1.8]	①底部～胴部破片②褐灰色	外面 底部～胴部鋸削り。 内面 底部～胴部鋸磨。
8 須恵器 壇	口径 - 底径 - 器高 [3.5]	①口縁部破片②灰白色	外面 轮縫整形後端調整。 内面 轮縫整形。

中林遺跡 2

PL1



全景(北西→)



SD1(北→)



南壁土層断面(北西→)



SD2(北→)

PL2



SD2土層断面(南→)

中林遺跡 2



A5-B下状況(北東→)



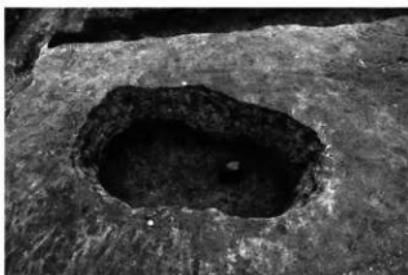
SK1土層断面(南東→)



SK1(西→)



SK2土層断面(南東→)



SK3(東→)



SK3土層断面(南→)



全景(東→)



全景(東→)



SD2-1



SK3-1



SK3-2



遺構外出土遺物-1



遺構外出土遺物-2



遺構外出土遺物-3



遺構外出土遺物-4



遺構外出土遺物-5



遺構外出土遺物-6



遺構外出土遺物-7



遺構外出土遺物-8

## 抄 錄

ふりがな	なかばやしいせき に							
書名	中林遺跡 2							
副書名	高崎市立群馬南中学校仮設校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査							
卷次								
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第458集							
編著者名	田辺芳昭							
編集機関	高崎市教育委員会							
編集機関所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1							
発行年月日	2021年3月15日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
なかばやし いせき 2 中林遺跡 2	ぐんまけんたかさきし 群馬県高崎市 みつでらまち 三ツ寺町	10202	787	36度 22分 28秒	138度 59分 41秒	2019.12.13 ～ 2020.01.31	130㎡	仮校舎建設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中林遺跡 2	集落	縄文	土坑1	土器片 (中期後半)	
		平安	溝跡1	土師器片 須恵器片	
		中世か	溝跡1・土坑2		確認遺構の構築時期は、埋没土からAs-B降下後と判断される。

所取遺跡名	要約
中林遺跡 2	平安時代水田跡の縁辺部付近に沿う溝跡を確認した。溝跡は水路や区画としての機能が想定される。 なお、本遺跡は古墳時代首長居館跡として知られる三ツ寺1遺跡の南東に隣接するが、同居館跡に隣接する遺構は未確認であった。

---

高崎市文化財調査報告書第 458 集

## 中林遺跡2

高崎市立群馬南中学校仮設校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

2021 年3月 15 日印刷  
2021 年3月 26 日発行

編集・発行／群馬県高崎市教育委員会  
群馬県高崎市高松町 35 番の1  
電話 027 (321) 1111 (代表)  
印 刷／荒瀬印刷株式会社

---